

物事にはいろんな見方があるということを教えてくれたある友だちとの話。

それは、僕が小学一年生のときだ。僕にはよく遊ぶ友達がいた。その友達は大変な口ぐせを持っていた。それは「知らない」という言葉だ。彼は何か質問をされるとすぐに「知らない」と言ってしまう。だから彼は友達が少なかつたのだろう。周りには無愛想に見えていただろうから。

そんな彼と僕が打ち解けたのは、席替えをして席が隣になってからだ。いろいろ話しかけても「知らない」ばかり言うから別の言葉も言わせてやろうと思って、昼休みに遊びに誘ったり、放課後は一緒に帰ったりした。そのかいあってか、僕は彼とかなり親しくなることができた。そして僕は思い切って質問を試してみた。

「どうして君は、いつも『知らない』って言うの？」

正直、いつも通りの返事がくるだろうなと思っていたけれど、

「僕は友達を作るのが苦手で、人とうまくしゃべれないんだ。だから、つい『知らない』って言うっちゃうんだよ。」

ああそうかと思った。僕と話をするときでさえ「知らない」と言うから、よほど人と話するのが苦手なのだろう。そんな彼に言わなければいけないことがあった。

小学二年生になった頃には、彼は、僕だけでなく僕の友達とも遊ぶようになった。そろそろいかなと思つた僕は彼に言わなければいけなかつたことを話した。

「僕は二年生の終わりに引越すよ。」

「へえ〜。」

「だから転校するんだ。」

「……知らない。」

彼は走って去って行ってしまった。その後彼と遊ぶことはなくなった。

転校まであと一週間となった。その日はとても強い風が吹いていた。向い風で帰れないでいると彼が僕の方に来てしゃべりかけてきた。僕の家へ来ないか？と。どうしてと聞くと、僕の家は君と正反対だからと言った。訳が分からず困惑していると、

「正反対の僕の家なら、向い風は追い風になるだろう？」

彼の家まで行く途中、全然追い風にならないって文句言ったら、「知らない」だって。その日僕たちはいろいろなことを話し合った。それは、なつかしいような、つい最近のようなどても不思議な感覚だった。そして一週間後僕たちは離ればなれになった。

今でも考える。彼と再会したら何を話そうかって。でも彼は、絶対に「知らない」って言うんだろうな。そのときの彼はきつと笑っているだろう。無愛想な彼にはもう会うことはないだろう。あの日から僕は彼に伝えたいことがあった。「向かい風は追い風になる」と教えてくれた彼に伝えたい言葉。それは僕の口ぐせになったんだ。

「ありがとう。」